



まちづくり・コミュニティ

町会・自治会

防犯・防災・みまもり

こども

教育

シニアライフ

健康

スポーツ

芸術・文化・趣味

環境

ふくしとサポート

NPO・ボランティア

国際交流

男女共同参画

農業・商工業

ホーム > 市民レポーター > 「東久留米歴史散歩（五） 浄牧院 大門町1-3-4」

浄牧院は曹洞宗の寺院で西武池袋線東久留米駅から徒歩五分程の所にあります。浄牧院は江戸時代に旗本であった神谷家、鈴木家の墓があることで知られています。寺伝によれば、室町時代の足利将軍義政の時代の文安元年（1444）に安祝（あんしゅく）によって開基され、開祖は崇芝性岱（すうしせいだい） 禅師です。安祝は当時、この地を治めていた守護代山内上杉氏の重臣、大石氏の家臣であったとされています。大石氏は上杉家の家老職でしたが、十四世紀中頃から入間、多摩一帯に進出し勢力を拡大しました。浄北院は末寺を六つ持つほどのお寺で広大な土地を所有していました。

墓が残る神谷家は三河以来の徳川家の直臣で天正十九年（1591）に神谷与七郎清正に南沢村の二百石の知行地が与えられました。その後、清正は先手鉄砲頭になり石高も最後には千五百石の旗本になりました。子の清房は二千石の旗本になり槍奉行や旗奉行を務めました。寺には清正はじめ九代の当主や清正の正室およびその父榊原伊豆守の墓石が並んでいます。写真でもわかりますが、武家墓所の景観がよく保たれています。また、鈴木家も三河からの旗本でしたが、くわしいことはわかっていません。二代の当主鈴木久兵衛重長、重政と重長の妻の墓が並んでいます。彼ら旗本たちの生活はどんなものだったのでしょうか。



江戸時代に将軍の直属家臣である大名・旗本・御家人のうち旗本は知行高一万石以下で将軍に謁見できる格式の人たちでした。

旗本には徳川家の三河以来の旧臣、今川、武田、後北条氏などの戦国大名の旧臣、大名や旗本の子弟で本家から知行地を分け与えられた人、同じく大名や旗本の子弟で新規に召し出された人からなっていました。旗本の人数はおおよそ五千人（御家人一万八千人）といわれ、江戸時代を通じてこの人数であったとされています。戦国時代から江戸時代のはじめには、城に城主が住み城下に家臣が住んでいましたが、江戸中期以後の太平の時代になると、武士は警護の務めより

も、むしろ行政が中心の仕事になりました。戦のなくなったこの頃になると旗本の財政は窮乏していったようです。



これは元禄のころから旗本の多くが江戸に住むようになったからだと言われています。もともと武士は米の石高で成り立っており、自分の知行地の米を幕府におさめ、その中から食いぶちの米を受け取り換金して必要なものを購入していました。

旗本の仕事が将軍の警護や行政になると、江戸に住むことが求められ一定の石高の米の支給になってゆきました。知行地がなくなり、不慣れな江戸生活と貨幣経済に巻き込まれて旗本の生活は次第に窮乏化していったようです。

これをみると、旗本といえども生活は楽なものではなかった。繁栄した江戸文化の中で質素な暮らしを求められました。

浄牧院には、神谷家、鈴木家の墓所の他にも見る価値のあるものがたくさんあります。二代目禅師大空玄虎が名著「碧巖大空抄」を著述したと伝わる土窟後や小田原北条氏の北条氏照（八王子城主）の正室が小田原合戦に敗れて浄牧院で自害したとされ、その墓も残されています。また、枯れ山水の庭や五百羅漢も見ることができ壮観な景色です。奥の本堂には徳川家康始め歴代の将軍の位牌や浄牧院創設時の三代の禅師の像も安置されています。

浄牧院に残る神谷家、鈴木家の旗本であった人たちは、どんな生活をしていたのでしょうか。浄牧院を訪ねてそれらを思うかべながら、その他の史跡を見るのもよいかも知れない。

参考文献「東久留米の江戸時代」（東久留米教育委員会）
【市民記者 浅羽芳久】